

脊髄造影検査にて神経徴候の悪化を生じた 椎間板ヘルニアのミニチュアダックスフンド2症例

坂口裕亮 田中 宏 北村雅彦 松本有紀 中垣佳浩
松倉将史 川辺朋美 中山正成[†]

奈良県 開業 (中山獣医科病院：〒630-8342 奈良市南袋町 6-1)

(2022年12月7日受付・2023年4月24日受理・2023年8月5日公開)



本文はこちら
https://www.jstage.jst.go.jp/article/jvma/76/8/76_e193/_article/-char/ja

要 約

CT検査により脊柱管内を大きく占拠する石灰化した椎間板物質を認めた椎間板ヘルニアのミニチュアダックスフンド2症例に遭遇した。2症例ともに脊髄造影検査を実施したところ、神経徴候が悪化した。片側椎弓切除術にて、椎間板物質の摘出を試みたが、周囲組織と癒着しており摘出は困難であった。このことから、CT検査で認められた石灰化した椎間板物質は、脊柱管内で時間経過を経たものと考えられ、脊柱管内を大きく占拠する椎間板物質に長い経過で圧迫されている脊髄に対し、造影剤を注入することで脊髄障害を悪化させた可能性が考えられた。以上より、CT検査によって脊柱管内を大きく占拠する石灰化した椎間板物質を認める症例に対し、脊髄造影検査を実施する際には悪化の可能性を考慮する必要がある。また、手術法やその適応など十分検討が必要であると考えられる。

——キーワード：石灰化，椎間板ヘルニア，脊髄造影検査。

-----日獣会誌 76, e193～e196 (2023)